

棕櫚の主日礼拝説教 「引き渡されるとき」

日本基督教団石神井教会 2018年3月25日

招詞 (エルサレム入城) 【旧約聖書】ゼカリヤ書 9章9～10節

【福音書】マルコによる福音書 11章1～11節

【旧約聖書日課】イザヤ書 50章4～7節

4 主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え

疲れた人を励ますように、言葉を呼び覚ましてくださる。

朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる。

5 主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。

6 打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。

顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。

7 主なる神が助けてくださるから、わたしはそれを嘲りとは思わない。

わたしは顔を硬い石のようにする。

わたしは知っている、わたしが辱められることはない、と。

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 2章5～11節

5 互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。6 キリ

ストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7か

えって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、

8へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。9このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。10こうして、天上

のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、11すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章32～42節

32一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、

ここに座っていなさい」と言われた。33そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、

イエスはひどく恐れてもだえ始め、34彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。

ここを離れず、目を覚ましていなさい。」35少し進んで行って地面にひれ伏し、できるこ

となら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、36こう言われた。「アッパ、

父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しか

し、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」37それから、戻

って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。38誘惑に陥らぬよう、目を覚ま

して祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」39更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。40再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。41イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。42立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

主イエスの《受難》の一週間

受難節（レント）の祈りの季節を歩んできたわたしたちは、最後の一週間、《受難週》を迎えました。「棕櫚の主日」と呼ばれるこの日からの一週間は、教会は、使徒たちの時代から、決して欠かすことのできない特別な祈りのときとして守ってきました。福音書が「受難物語」として伝える主のご受難の一週間は、わたしたちも、大切な祈りのときとして大切に過ごすのです。

「**主がお入り用なのです**」（マルコ 11:3）。弟子たちにそう告げられて縄を解かれた子ろばが、週の初めの日、主イエスをお乗せしてエルサレムの城門をくぐりました。そのとき、多くの人々が、子ろばに乗ってエルサレムの町に進み入られた主イエスを歓迎して、叫んだのです。「**ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ**」（マルコ 11:9~10）。

主にお用いいただくために差し出される子ろば。その子ろばを用意する弟子たち。そしてその子ろばに乗って来られる主をお迎えする人々。

わたしたちも、同じようにして、主をわたしたちのただ中にお迎えしています。主をお迎えするために、わたしたちは、主に用いていただくわたしたちの「子ろば」を差し出しました。主をお迎えするために、わたしたちは、わたしたちの奉仕者たちに「子ろば」を整えさせました。主をお迎えするために、わたしたちは、主をほめたたえるわたしたちの歓呼の讃美を歌いました。

「棕櫚の主日」の出来事は、主をお迎えしてささげるわたしたちの礼拝の最も誇らしい様を描き出してくれている、と言ってもよいでしょう。けれども、わたしたちは、このように喜びの讃美のうちにお迎えした主が進み行かれる先に、さらに導かれて行かなければなりません。

今日の福音書で、主イエスは、わたしたちを祈りへとお導きくださいます。主が祈られる祈り、そして、主の祈られる祈りに導かれて祈るように促されるわたしたちの祈り、です。しかし、ここに描かれるのは、ただ主が祈られる祈りだけです。主の傍らには、祈るように促されても祈ることができずにいる弟子たちがいます。子ろばを用意することはできても、讃美を歌うことはできても、主に導かれて共に祈ることはできないでいる弟子たちです。そのような弟子であっても、主は、なおご自身の傍らに伴ってくださいているのです。

礼拝前に奉仕者の皆さんと祈るときを持ってきました。礼拝当番の皆さんも一人一人、祈りをしてくださるので、この教会の祈りの傾向のようなものが分かってきました。祈りの言葉は、必ずしも心の中から自然に湧いてくるものではありません。わたしたちは皆、無意識のうちに、育った教会の中で聞き続けてきた先輩信者や聖書の中にある祈りの言葉を身に着けて、自分の祈りの言葉としているのです。わたしたちが初めから祈ることができないのは、当然です。弟子たちも祈れなかったのです。主イエスは、そのような弟子たちを、ご自分の祈りの場に伴われました。祈りの言葉をお聞かせくださったのです。どう祈ればよいのか分からないでいる者に、主は、祈りの言葉をお授けくださるのです。

「ここを離れず、目を覚ましていなさい」

弟子たちは、幾度、そのような主イエスの祈りの場に伴わせていただいたのでしょうか。きっと、数えきれないほどの機会を与えられたことでしょう。しかし、彼らが自分たちの祈りの言葉を本当に見出させていただいたと自覚できた機会は、案外少なかったのかもしれませんが。

主イエスが弟子たちとの祈りの場として繰り返し訪れていたとされるゲッセマネの園は、オリーブ畑の広がる山のふもとにある油搾り場だったと言われます。主イエスは、いつもそこを訪れるたびに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と弟子たちにお命じになられていたのでしょうか。弟子たちは、主イエスが祈られている間、命じられたところに座って、何をしていたのでしょうか。主イエスの祈られる声に聴き耳を立てる者もあったでしょう。この機会にとばかり、自分の物思いにふける者もあったかもしれません。礼拝中、お座りになられている皆さんと同じです。

その弟子たちの中から、三人だけを主イエスが伴われて、ご自分のすぐ近くに居させようとなさったのは、なぜだったのでしょうか。主イエスの意図は、分かりません。けれども、少なくともこの三人は、自分たちが主イエスから離れられないところに置かれていると、自覚しないではいられなかったのでしょうか。主イエスに自分の心を驚掴みにされていたのです。主イエスのすべてをこの目に焼き付け、一言も聞き逃すまいとの思いを持って、主イエスの傍らに伴わせていただいていたのに違いないのです。わたしたちも、礼拝中にそのような思いを抱くことがあるのではないのでしょうか。

しかし、そのような三人に対して、主イエスは、繰り返し「目を覚ましていなさい」とおっしゃられました。彼らが眠ってしまっていたからです。彼らはひどく眠かった、というのです。眠気が襲ってきたときに、それに抗うだけの刺激を得ることは、なかなか難しいことです。座って人の声を聴いている状態であれば、なおさらです。世の中には、聴き手を決して眠らせない語り手がありますが、説教者が必ずしもそうとは言えないのが、教会の現実です。しかし、三人の弟子たちの場合は、どうだったのでしょうか。そこで声を響かせて祈られているのは、ほかでもない主イエスです。自分は間もなく捕らえられて十字架にかけられると、自ら宣言していたお方です。主イエスだけでなく、弟子たちの間にも、極度の緊張があり、興奮状態が続いていたのではないのでしょうか。眠気が襲ってくる余地など、どこにも無かったのではないのでしょうか。

それでも人は、眠りに落ちることがあるのかもしれませんが。自分が受け入れたくない現実を前にして、受け入れがたい事実を前にして、心を閉ざすために、眠りに逃げるのです。

「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい」。そう告げられて祈りに向かわれた主イエスを前にして、弟子たちは、目を覚ましていられなくなりました。そこを離れないではいられなくなったのです。いいえ、離れられないので、眠りに逃げざるを得なかったのでしょうか。

「立て、行こう」

弟子たちが目を覚まして居続けることができなかつたところ。それは、主イエスが「わたしは死ぬばかりに悲しい」とお語りになられたところです。すると、弟子たちは、主イエスがあまりに深く嘆き悲しまれているので、居た堪れなくなつた、ということかもしれません。確かに、わたしたちは、本当に深い嘆きや悲しみのうちにある方に対しては、どうしてよいのか分からなくなるのです。ただ傍らに寄り添う、ということさえ難しく思えるのです。M. ルターは、この主イエスのお姿を指して、「この人こそ、まことに死を怖れた人だ。これほどに死を怖れた人はない」と記しているようですが、そのような死に対する怖れを全身で受けとめられているお方の悲しみを、弟子の一人が目をそらさずに直視し続けることなど、どう考えてもできそうにないことです。ただ、わたしは、そのようなこともあるかと思ひながらも、そうであればなおさら、わたしたちに主イエスの本当の心のうちは分からない、と思わされるのです。本当のところ、主イエスは、そのときどのような心情でいらしたのか、わたしたちにはわからない。

それでも、分かることもあります。主イエスの言葉遣いです。主イエスが、どのような言葉を、弟子たちの前にお示しになられたのか、ということです。

「わたしは死ぬばかりに悲しい」という主の言葉を、文語訳では「わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり」と訳していました。「わたし」は「わが心」だということです。実際、聖書の原文は「わが」と「心」の二語から成っているようです。この「心」と訳される語（プシュケー）は、ほかの個所では「命」と訳されている語です。「安息日に律法で許されているのは…命を救うことか、殺すことか」（3:4）と言われたときの「命」です。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」（8:35~37）と繰り返された「命」です。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」と告げられたときの「命」です。主イエスは、弟子たちを祈りの場に伴われて、「わたしの命は、死に至る悲しみである」とおっしゃられていたのです。

弟子たちに、その言葉の意味が分かり得たのでしょうか。わたしたちに、その意味が分かり得るのでしょうか。弟子たちが分からなくても、わたしたちが理解し得なくても、主イエスは、その先に歩みを進められるのです。ご自身を、その命を、人々の手に引き渡されるのです。

「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」。弟子たちの耳に、この祈りの言葉が残りました。この祈りをわたしたちに残して、主は、お呼びかけになられるのです、「立て、行こう」と。命が引き渡される所に行くのです。そこで、死に至る悲しみは、深まるのでしょうか。しかし、主の命は、弟子たちを、わたしたちを、立ち上がらせるのです。